鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(14)

鹿児島県立国分高校仮設校舎建築工事に伴う埋蔵文化財
発掘調査報告書

本御内遺跡
（もとおさと）

所在地　国分市中央二丁目８－１

１９９５年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序　　文

この報告書は，県立国分高校仮設校舎建築工事に先立って，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した本御内遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

本御内遺跡は，鹿児島湾奥部国分平野の中央部に位置し，旧薩摩藩主島津義弘によって築城された舞鶴城跡遺跡を包括する，弥生時代から近世までの遺跡として知られています。

今回の調査では，中世・近世を主体とした歴史時代の遺物・遺構が発見され，新たな資料を提供してくれました。

本報告書が，南九州の歴史研究及び文化財保護のために一役を担うことができれば幸いです。終わりに，この発掘調査に御協力をいただいた県教育庁学校施設課・県立国分高校並びに地元の皆様に心から感謝いたします。

平成７年３月

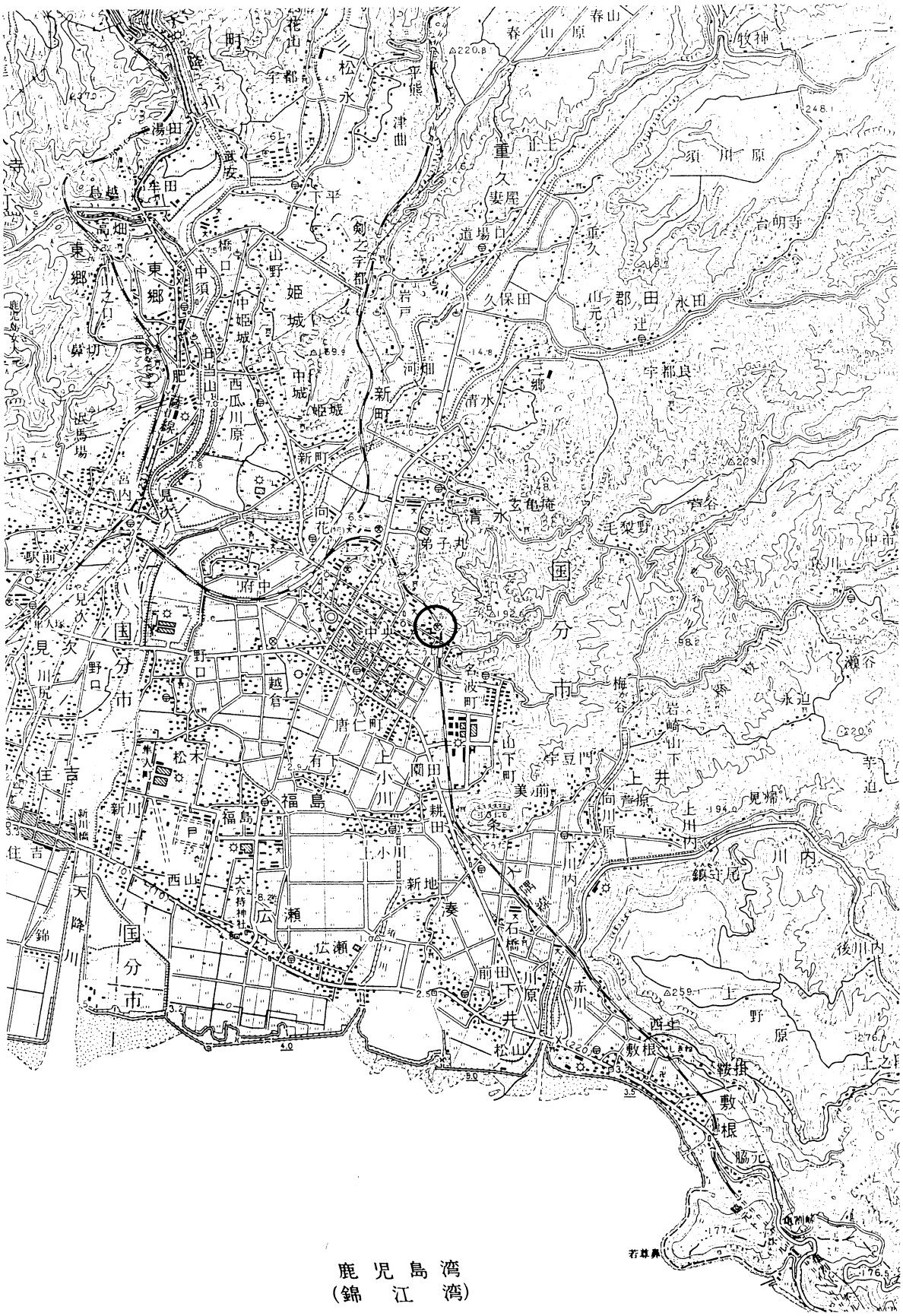
鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　　内村　正弘

報告書抄録

ふりがな	もとおさといせき
書名	本御内遺跡
副書名	鹿児島県立国分高校仮設校舎建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	14
編著者名	肱岡　隆夫・青崎　和憲
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-56　鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地　TEL0995-65-8787
発行年月日	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
もとおさといせき 本御内遺跡	かごしまけんこくぶし 鹿児島県国分市 ちゅうおうにちょうめ 中央二丁目8-1	462128		31度 44分 12秒	130度 46分 07秒	19940802 ～ 19940823	200	県立国分高校仮設校舎建築工事に伴う全面調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本御内遺跡	散布地 城館	古墳時代		成川式土器 土師器 布目瓦片 青磁 陶磁器(染付・薩摩焼)	
		中世	水田遺構		
		近世	土坑　2基 ピット　12基		
		近・現代	溝状遺構　3条		



付図　本御内遺跡の位置図　（5万分の1）

例　言

1　この報告書は，鹿児島県立国分高校仮設校舎改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，鹿児島県教育庁学校施設課の依頼を受けて，県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査については，県立国分高校の協力を得た。

4　遺物番号は，すべて通し番号であり，本文及び挿図・図版の番号は一致する。

5　挿図の縮尺は各図ごとに示している。

6　本書で用いたレベル数値は，国分市が設置したベンチマークから移動した高さを基準とした海抜絶対高である。

7　出土遺物の整理復原作業等は，県立埋蔵文化財センターの整理作業員が行い，遺構・遺物の実測・トレース・写真撮影は，肱岡，青崎が行った。

8　本書の執筆分担は，以下のとおりである。

第Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ章第2節，Ⅵ章 …… 肱岡

第Ⅴ章第1節 …… 青崎

9　本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，肱岡が担当した。

10　遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する計画である。

本　文　目　次

第 Ⅰ 章　調査の経過 …… 7
　第1節　調査に至るまでの経過 …… 7
　第2節　調査の組織 …… 7
　第3節　調査の経過 …… 7

第 Ⅱ 章　位置と環境 …… 9
　第1節　位置及び自然環境 …… 9
　第2節　歴史的環境 …… 9

第 Ⅲ 章　調査の概要 …… 14
　第1節　調査の概要 …… 14
　第2節　遺跡の層位 …… 14

第 Ⅳ 章　遺構 …… 16
　第1節　中世 …… 16
　第2節　近世 …… 18
　第3節　近代・現代 …… 19

第 Ⅴ 章　遺物 …… 22
　第1節　第Ⅳ層出土遺物 …… 22
　第2節　溝状遺構出土遺物 …… 23

第 Ⅵ 章　まとめ …… 25
　第1節　遺跡の概要 …… 25
　第2節　遺構 …… 25
　第3節　遺物 …… 26

挿　図　目　次

付　図　本御内遺跡の位置図 …… 3
第1図　周辺遺跡分布図 …… 12
第2図　標準土層柱状模式図 …… 13
第3図　遺跡周辺地形図 …… 14
第4図　遺跡の層位 …… 15
第5図　水田遺構 …… 16

第６図　遺構分布図(近世以降) …… 17
第７図　土坑 …… 18
第８図　ピット …… 19
第９図　溝状遺構１，３ …… 19
第10図　溝状遺構２ …… 20
第11図　Ⅳ層出土遺物(1) …… 21
第12図　Ⅳ層出土遺物(2) …… 22
第13図　Ⅳ層出土遺物散布状況 …… 23
第14図　溝状遺構出土遺物 …… 24

表　目　次

付　表　報告書抄録 …… 2
第１表　遺跡地名表 …… 11
第２表　ピット一覧表 …… 18

図　版　目　次

図版１　１　本御内遺跡遠景　昭和42年（南から，航空写真），２　本御内遺跡近景（南東から） …… 29
図版２　１　本御内遺跡の層位，２　水田遺構（畦畔），３　近世以降遺構分布状況（ピット，土坑，溝状遺構３），４　土坑１完掘状況，５　ピット９半裁状況，６　土坑２完掘状況 …… 30
図版３　１　溝状遺構１完掘状況，２　溝状遺構１，３北側断面，３　溝状遺構３完掘状況，４　溝状遺構３内検出杭１，５　第Ⅳ層遺物出土状況，６　溝状遺構２検出状況，７　遺物（19）出土状況，８　遺物（11）出土状況 …… 31
図版４　第Ⅳ層出土遺物 …… 32
図版５　溝状遺構内出土遺物 …… 33

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県教育庁学校施設課(以下，学校施設課)は，県立国分高等学校(所在地 鹿児島県国分市中央二丁目８－１)の理数科新設に伴う仮設校舎建設を計画し，県教育庁文化課(以下，文化課)に対して埋蔵文化財の調査を依頼した。

高校敷地は舞鶴城跡と隣接していることや，昭和62年，平成４，５年の発掘調査結果から判断して，本地域が埋蔵文化財の包蔵地であることから，学校施設課と文化課は，埋蔵文化財の保護と事業との調整を図るため協議を行った結果，平成６年度発掘調査を行い，埋蔵文化財の記録保存を行うこととなった。発掘調査及び報告書作成は，県立埋蔵文化財センターが行った。

第2節　調査の組織

事業主体	鹿児島県教育庁学校施設課		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査企画・調整	鹿児島県教育庁文化課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	内村　正弘
調査企画者	〃	次長兼総務課長	川原　信義
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
調査担当者	〃	文化財主事	青崎　和憲
	〃	文化財主事	肱岡　隆夫
調査事務担当者	〃	主査	成尾　雅明
	〃	主事	中村　和代

第3節　調査の経過

発掘調査は，平成６年８月２日(火)から８月23日(水)の間に実施した。整理作業及び報告書作業は，発掘終了後，平成７年１月７日(月)から２月17日(金)の間に実施した。以下，日誌抄により発掘調査の経過を略述する。

８月２日(火)

埋蔵文化財センターから道具搬入。プレハブ等の設営。調査区域を設定し，重機による表土剥ぎを行う。調査区域は，仮設校舎建設予定地に合わせ，東西18m，南北9.20mとした。また，調査区域北側ラインを基準として，北－南方向にＡ～Ｂ，西－東方向に１～４の５ｍグリッドを設定した。

なお，校庭の一部を排土仮置場として利用することとした。

８月３日(水)

〈Ａ・Ｂ－１区〉の西端部分幅１ｍを先行トレンチとして掘り下げ，層位の確認をする。これに基づき地表下約１．４ｍまでの表土を重機で掘り下げる。

〈A－2区〉から〈B－1区〉Ⅱ層上面において溝状遺構1を検出し，掘り下げを行う。現代瓦・ガラス片等の現代遺物が多数出土する。完掘し，実測・写真撮影を行う。

8月4日(木)

〈A－3・4区〉から〈B－3・4区〉Ⅱ層上面において3条の溝状遺構2を検出する。溝状遺構1の下部に，溝状遺構3を検出し，平面実測及び写真撮影を行う。

8月5日(金)

溝状遺構3を掘り下げる。覆土中より，現代瓦・ガラス片の他，青磁・白磁，染付，薩摩焼，布目瓦等が出土。溝の東側部分に杭を検出する。溝状遺構3を完掘し，平板実測・写真撮影を行う。

8月8日(月)

溝状遺構3を完掘し，平板実測・写真撮影を行う。Ⅱ層を掘り下げ，Ⅲ層上面で水田の基盤層を検出。精査の結果，小ピット7基，土坑2基を検出し半裁・実測を行う。

8月9日(火)

前日検出した，小ピット・土坑を完掘すると共に新たに小ピット5基を検出。写真撮影を行う。

8月10日(水)

小ピット及び土坑を完掘し，平板実測する。〈A－1・2区〉から〈B－1区〉にかけて水田基盤層の掘り下げ。Ⅲ層下部において畦状遺構を検出する。

8月11日(木)

ピット検出面を清掃し，全景写真の撮影を行う。水田基盤層下の畦状遺構を完掘。プレハブ及び調査区の台風養生を行う。

8月12日(金)

台風による雨のため，作業を中止する。

8月16日(火)

畦状遺構の写真撮影及び平板実測を行う。Ⅳ層の黒色土を掘り下げ，土師器の包含層であることを確認する。

8月17日(水)

黒色土層を掘り下げる。土師器及び瓦片が出土。

8月18日(木)

黒色土層出土遺物の出土状況写真撮影及び平板実測を行う。

8月19日(金)

前日に引き続き，遺物の平板実測を行う。調査区の南壁及び西壁側を重機でⅤ層のシラス及びその下部の泥炭層まで深堀りする。遺物は確認されなかった。土層断面の写真撮影を行う。

8月22日(月)

調査区，北・南・西壁土層断面を実測。作業用具の整理を行う。国分小学校より，遺跡の近景を撮影する。

8月23日(火)

調査を終了すると共に，作業用具・出土遺物等の整理を行い，埋文センターに搬入する。

プレハブ等の撤去を行うと共に，県教育庁学校施設課及び国分高校に調査終了の報告をする。

第Ⅱ章　位置と環境

第１節　位置及び自然環境

本御内遺跡は，鹿児島県国分市中央二丁目８－１（大字上小川，小字犬追馬場）鹿児島県立国分高校敷地内に所在する。

本遺跡の所在する国分市は，鹿児島県のほぼ中央部に位置し，東は福山町，北は財部町，霧島町，西は隼人町に接し，南は鹿児島湾（錦江湾）を隔て，指呼の間に桜島を望む霧島山麓の国分平野を主体とする拠点都市である。本市は，県都鹿児島市から約30km，川内市から約45km，鹿屋市から約45kmと地理的条件に恵まれている上，鹿児島国際空港や九州縦貫道等のアクセス手段の整備や国分テクノパーク構想等の計画・推進により，県下においても目覚ましい成長を遂げている地域であると言える。

国分市周辺の地形は，北部から南東部に点在する姶良カルデラ噴出によるシラス台地，西部から南部に広がる国分平野の沖積低地，および東北部の山地に三大別される。国分平野は，天降川，検校川等の大小河川の流水作用を受け形成された三角州と干拓地からなり，現在最も土地活用が進んでいる地域である。シラス台地は，上記河川の作用による侵食谷で細分され，溶結凝灰岩が露出して海抜250m内外の高さの急崖を持つ地形となっている。この台地上では，近年上野原テクノパーク造成等により，あいついで様々な遺跡が発見され，縄文時代早期を中心に全国から注目されているところである。

遺跡地は，国分平野北東方向から市中心部に伸びる，天降川・検校川に挟まれたシラス台地の先端部と沖積平野との境界部分に位置し，海抜約10ｍの標高を持つ。本遺跡は，舞鶴城跡遺跡東隣に接し，平成４，５年度に発掘調査が行われた本御内(舞鶴城跡)遺跡と一連の関係を持つ遺跡である。　北側には，舞鶴城の詰城であるとされる標高192.6mの通称「城山」を控え，また，当遺跡の北西約400mの地点には，大隅国分寺址。北東約300mの地点には妻山元遺跡などが所在するなど，各時代をとおして遺跡が密に立地する地域である。

第２節　歴史的環境

国分市は，かつて大隅国府並びに大隅国分寺の所在地として発展した地域である。そのため，奈良・平安時代以降の遺跡を中心として知られていたが，国分平野を活用した都市開発や国分テクノポリス構想に基づく地域開発等の事業，数多くの研究者の調査により，近年新たに数多くの遺跡が報告されるようになってきた。

第１図及び第１表は，本遺跡周辺の遺跡分布図であるが，その大部分は国分平野（沖積平野）とシラス台地の境界部分や平野に面する台地上に点在している。

旧石器時代の遺跡については，現在報告はなく，今後の調査を待たなければならない。

縄文時代の遺跡では，平栫貝塚**1**，中囲貝塚**2**，名波Ｂ遺跡**9**，城山山頂遺跡**11**，妻山元遺跡**12**，鍛冶屋馬場遺跡**16**等がある。平栫貝塚は，昭和46年に河口貞徳氏によって発掘調査された，早期の

平栫式土器の標式遺跡として著名である。城山山頂遺跡は，遺物包含層は確認されなかったものの，前平式・吉田式等の縄文時代早期の土器片が出土している。妻山元遺跡は，縄文時代晩期の黒川式土器が出土している。鍛冶屋馬場遺跡では，縄文時代後期の市来式土器が見られる。名波Ｂ遺跡では，阿高式土器の採集が報告されているが詳細は不明である。

弥生時代の遺跡では，平成５年に発掘調査が行われた本御内遺跡**13**から，弥生時代後期と推定される住居跡・破砕鏡が検出され，中国大陸及び北部九州との交流を裏付ける資料となっている。本御内遺跡以外の遺跡については，現時点で十分な調査は行われていなく，山下Ａ遺跡**8**，大平遺跡**10**，園田遺跡**6**，清水Ａ遺跡**19**，Ｂ遺跡**20**，Ｃ遺跡**21**，弟子丸Ａ遺跡**25**，Ｂ遺跡**26**，Ｃ遺跡**27**などで遺物の発見が報告されているに留まっている。

古墳時代の遺跡は比較的多く，土器片の出土が知られているが，本地域における高塚式古墳は今のところ報告されていない。ただ，昭和29年亀甲土坑**33**で４基の土坑が発見され，鉄製太刀等が検出されている。また，城山山頂遺跡からは，43基の住居跡と共に畿内地方の布留式土器が出土しており，この地方における豊かな古墳文化が形成されていたことを窺わせ，併せて南九州と大和勢力との係りを知る手掛かりともなっている。

奈良・平安時代は，当地に大隅国府・国分寺が設置されていたことにより，数多くの遺跡がある。中でも，鍛冶屋馬場遺跡**16**，国府（小路）遺跡**17**は，大隅国分寺跡**15**に隣接していることや，布目瓦等の出土遺物から，その寺域を知るための重要な手掛かりとなる遺跡である。また，平成４・５年の本御内遺跡の調査でも当時のものと考えられる溝状遺構が検出されており，併せて国分寺との関連が考えられている。一方，大隅国府の所在地は，現時点では確認されていないが，その地名により岡見山遺跡**35**などが関連のある遺跡と考えられ，今後の調査研究が期待される。

江戸時代の遺跡では，舞鶴城跡**14**がある。この城は，慶長９年(1604)島津義久が築城したもので，別名を国分新城というが，城構えは，天守閣をもたない館造りで，山麓に平時の居館を構え，背後の山を非常時の詰城とする形であり，現在の城山がこれに当たる。現在の国分市街地も，舞鶴城築城の際の町割が基本となっている。

第１表　遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	平栫貝塚	上井201	台地	縄(早)	平栫式，昭和46年河口貞徳氏調査
2	中囲貝塚	上井一条	台地	縄(早)	押型文，石器，人骨
3	桶脇	桶脇	山麓	古	土師器，成川式
4	上井城跡	上井一条	山岳	中世	上井氏居城
5	山下A	山下町鎮守		弥・古	昭和55年新田栄治氏調査
6	園田	上小川園田	平地	弥	土器
7	山下B	山下町高田宇都		古	昭和55年新田栄治氏調査，土師器片
8	名波A	名波町小波谷		弥・古	〃　土器，土師器片
9	名波B	名波町小平原		縄・古	〃　土器，土師器片
10	大平	上小川大平	山麓	弥	土器
11	城山山頂	上小川新城	山頂	縄・古	吉田式，土師器，須恵器，昭和52,53年国分市調査
12	妻山元	中央二丁目2819	山麓	縄・古	黒川式，成川式，須恵器，昭和59年国分市調査
13	本御内	中央二丁目8-1	山麓	弥・古	土器，水田，住居跡，破砕鏡
14	舞鶴城跡	上小川鐘穴	山麓	中世	石垣，島津義久居城
15	大隅国分寺址	中央一丁目237	平地	歴	瓦，層搭
16	鍛冶屋馬場	中央一丁目3590	平地	縄・歴	平成元年国分市調査
17	国府（小路）	中央一丁目1930	平地	歴	瓦片，昭和63年国分市調査
18	坂下	中央一丁目坂下		歴	瓦窯跡，瓦片
19	清水A	清水堤田		縄弥古	昭和55年新田栄治氏調査
20	清水B	清水トチメ田			〃
21	清水C	清水九万田		弥・古	〃
22	鼻連山城跡	中央一丁目10	丘陵	中世	
23	清水城跡	中央外城	山岳	中世	山城
24	玄亀庵	清水玄亀庵		弥・古	
25	弟子丸A	清水平等寺		弥・古	昭和55年新田栄治氏調査，土器・土師器
26	弟子丸B	清水溜池		弥・古	〃　土器・土師器
27	弟子丸C	清水寺馬場		弥・古	〃　土器・土師器
28	智尾岡	弟子丸乳尾	平地	弥(後)	土器
29	弟子丸D	清水畑井田		弥・古	昭和55年新田栄治氏調査，土器・土師器
30	姫城城跡	姫城城山	山岳	中世	山城
31	竹下	姫城竹下	畑地		土師
32	こがの杜	姫城木ヶ森	畑地	弥	
33	亀甲土坑	府中亀甲亀里	畑地	古	土師器，須恵器，昭和29年寺師見国氏調査
34	大隅国府跡	府中亀甲亀里	畑地	歴	瓦
35	岡見山	府中塚脇	台地	弥・歴	土器，瓦，昭和59年国分市教委調査
36	気色の杜	府中天神坊	小台地	弥	土器，石斧，祭器
37	弥勒寺	野口弥勒寺	畑地	古	成川

参考文献　1　鹿児島県教育委員会「鹿児島県市町村別遺跡地名表」1977年
2　新田栄治　「鹿児島湾北部における考古学的一般調査報告１」『鹿児島大学教養部史学科報告第29号』1980年
3　鹿児島県教育委員会「国分・隼人テクノポリス建設地区埋蔵文化財分布調査報告書」鹿児島県埋蔵文化財報告書(33)　1985年

妻崖
道場口
剣の宇都町
高畑
松元
東郷
新溝
中須
橋口
山野
新七
姫城
中姫城
中城
平岡
甘当山
西瓜川原
新町
姫城
新町上
新町
九州自然歩道
河畑
清水
玄竜庵
弟子丸
豊本線
国分
上小川
福島二丁目
中央二丁目
中央四丁目
中央五丁目
中央六丁目
野口東
松木東
松木町
隼人町
名波町
山下町
美ノ前
久保田

第１図　周辺遺跡分布図

第Ⅲ章　調査の概要

第1節　調査の概要

発掘調査は，仮設校舎建設予定地内に5m×5mのグリッドを設定して行った。グリットは，建設予定地の北端を基準に，北－南方向にA～B区，西－東方向に1～4区を設定した。

調査に当たってまず，西端に幅1mの先行トレンチを設定して表土の状態を確認し，次に，重機で表土全体を掘り下げた。その後，表土を取り除いた状態で，南端に幅50cm，長さ5mの先行トレンチを再び設定し，Ⅱ層以下の層位及び遺物状況を確認し，その後，人力を主体に掘り下げていった。

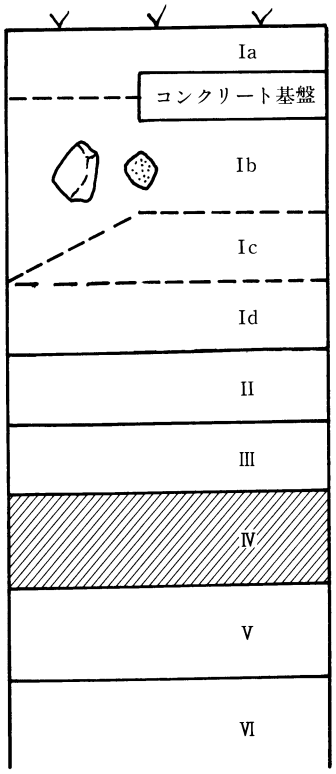
Ⅱ層は，上面でA－2区からB－1区にかけて，近代以降該当の溝状遺構**1**，**3**及びA・B－3・4で溝状遺構**2**が検出され，覆土中から近現代の遺物が多数出土した。

Ⅲ層は，上面で調査区ほぼ全域から，近世相当の土坑やピットが検出された。

Ⅳ層では，上面で中世相当の水田遺構が検出され，基盤下部(Ⅳ層土)より，土師器・国分寺期相当瓦片等が出土した。

Ⅴ層以下は，重機で深堀りを行ったが，遺物包含層は確認されなかった。

第2節　遺跡の層位



第2図　標準土層柱状模式図

Ⅰ層　表土。堆積状態で4層に分層した。

Ⅰa層は，旧建物コンクリート基盤を挟んだ，淡白茶色土層であり，客土と考えられる。厚さは，平均25cm程度である。

Ⅰb層は，茶褐色土層であり，礫，ブロック塊，ガラス片等が多数混入している。厚さは，平均45cm程度である。

Ⅰc層は，灰色土層である。厚さは20cm内外で，部分的に存在する。

Ⅰd層は，Ⅰc層よりもやや明るい灰色土層で，レンズ状の灰白色火山灰を含んでいる。厚さは20cm内外である。

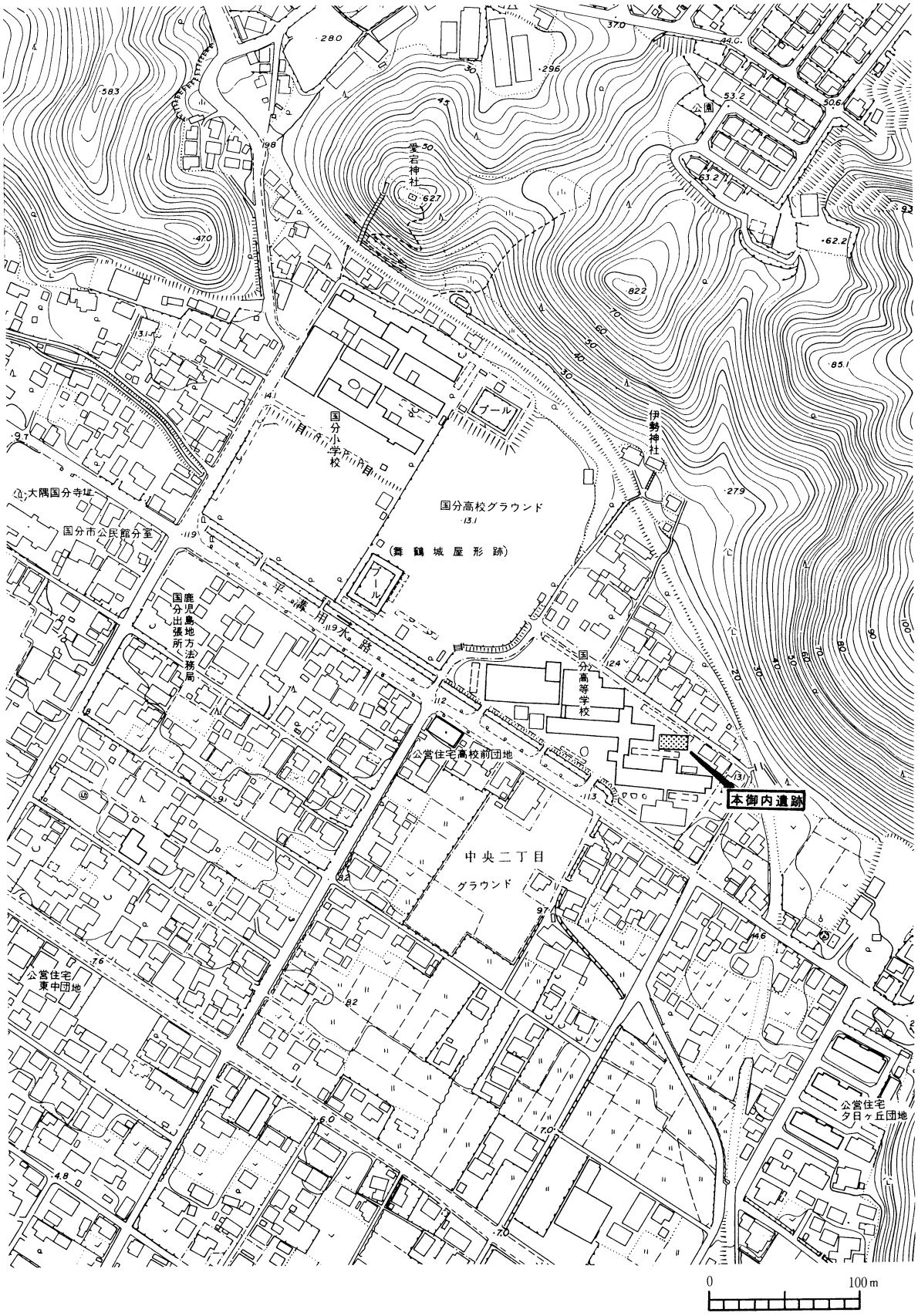
Ⅱ層　明灰褐色土層。上部に酸化鉄層を持ち，小軽石を多数含んでいる。厚さは30cm内外である。無遺物層。

Ⅲ層　黄褐色砂互層。上部は酸化鉄層を持ち，下部は灰色粘土が堆積している。水田跡と考えられ，部分的には，3枚の基盤層が見られた。無遺物層。

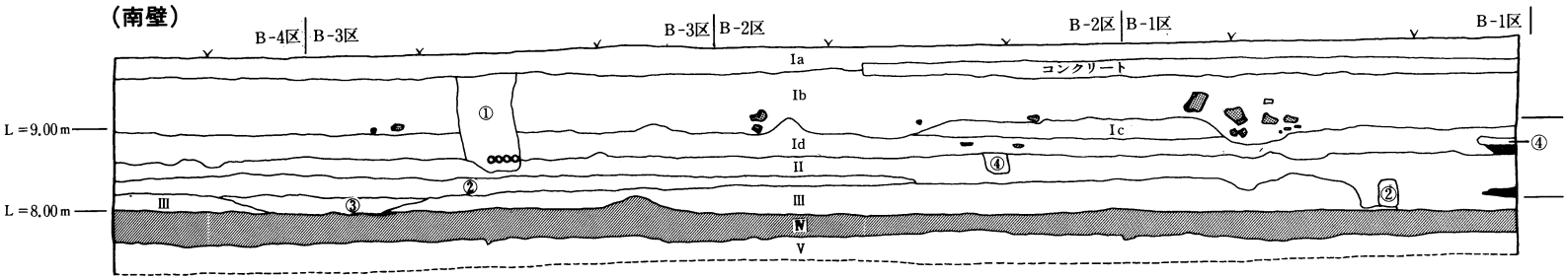
Ⅳ層　灰色粘土層。やや紫がかり，下部は黒色化している。土師器，瓦片等が出土し，上面で水田畦畔が検出された。

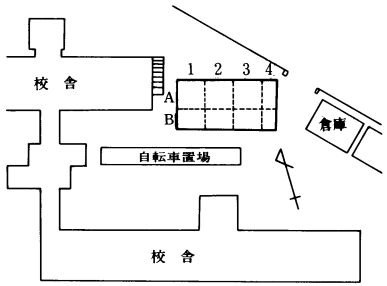
Ⅴ層　シラスの2次堆積層である。無遺物層。

Ⅵ層　泥炭層である。無遺物層。


愛宕神社
公園
国分小学校
プール
伊勢神社
国分高校グラウンド
(舞鶴城屋形跡)
大隅国分寺址
国分市公民館分室
鹿児島地方法務局国分出張所
平瀬用水路
国分高等学校
公営住宅高校前団地
本御内遺跡
中央二丁目
グラウンド
公営住宅東中団地
公営住宅夕日ヶ丘団地
0
100m

第３図　遺跡周辺地形図



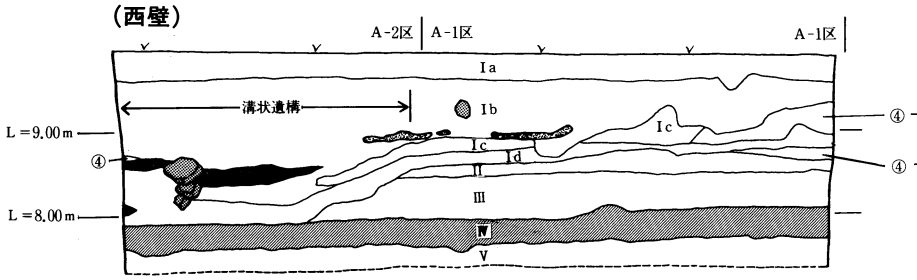


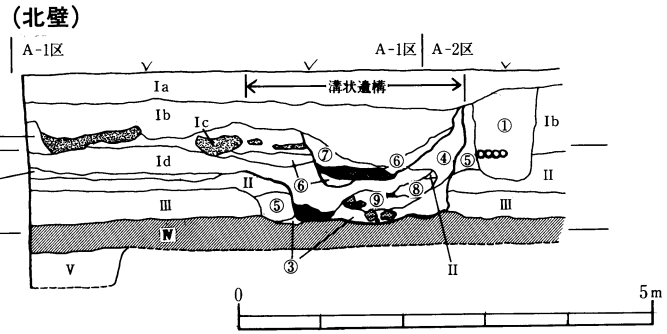
- 礫
- 白色火山灰
- 砂
- 遺物包含層

① 礫混じり黒色土（送電管理設土）
② 黄褐色砂（酸化鉄を多く含む）
③ 灰色粘土（Ⅲ層下部に相当）
④ 暗灰褐色土
⑤ 黒色土混じり黄褐色砂
⑥ 明茶褐色土
⑦ 暗茶褐色土
⑧ 礫混じり明灰褐色土
⑨ 砂礫混じり灰褐色土

《基本土層》

Ia 淡白茶色土
Ib 茶褐色土（礫、ブロック、ガラス等混じり）
Ic 灰色土
Id 明灰色土（レンズ状灰白色火山灰を含む）
II 明灰褐色土（上部は酸化鉄層、小軽石を含む）
III 黄褐色砂（上部は酸化鉄層、下部は灰色粘土層、互層）
IV 灰色粘土（紫色を帯び、下部は黒色化）
V シラス（2次堆積層）





第4図 遺跡の層位

第Ⅳ章　遺　構

第1節　中世

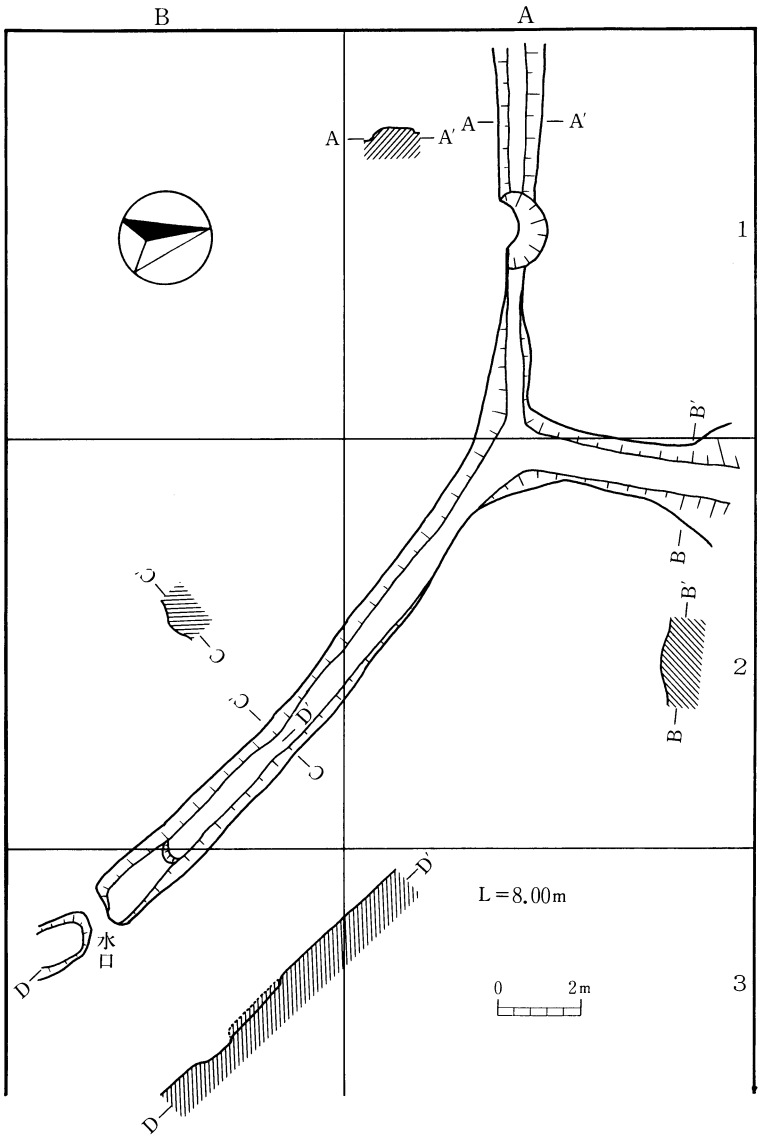
1　水田遺構

Ⅳ層上面から，畦畔が検出された。畦畔は，A－2区北端から北北西に約3m伸びた部分で二又に分かれ，西側及び南東方向にそれぞれ5m，8.5m伸びている。幅は50cm内外で基盤からの高さは最も高い所で15cm程度であり，B－3区南端60cmの所に，幅約20cmの水の取り入れ口(水口)と思われる切れ目を持っている。水口の深さは約15cmである。

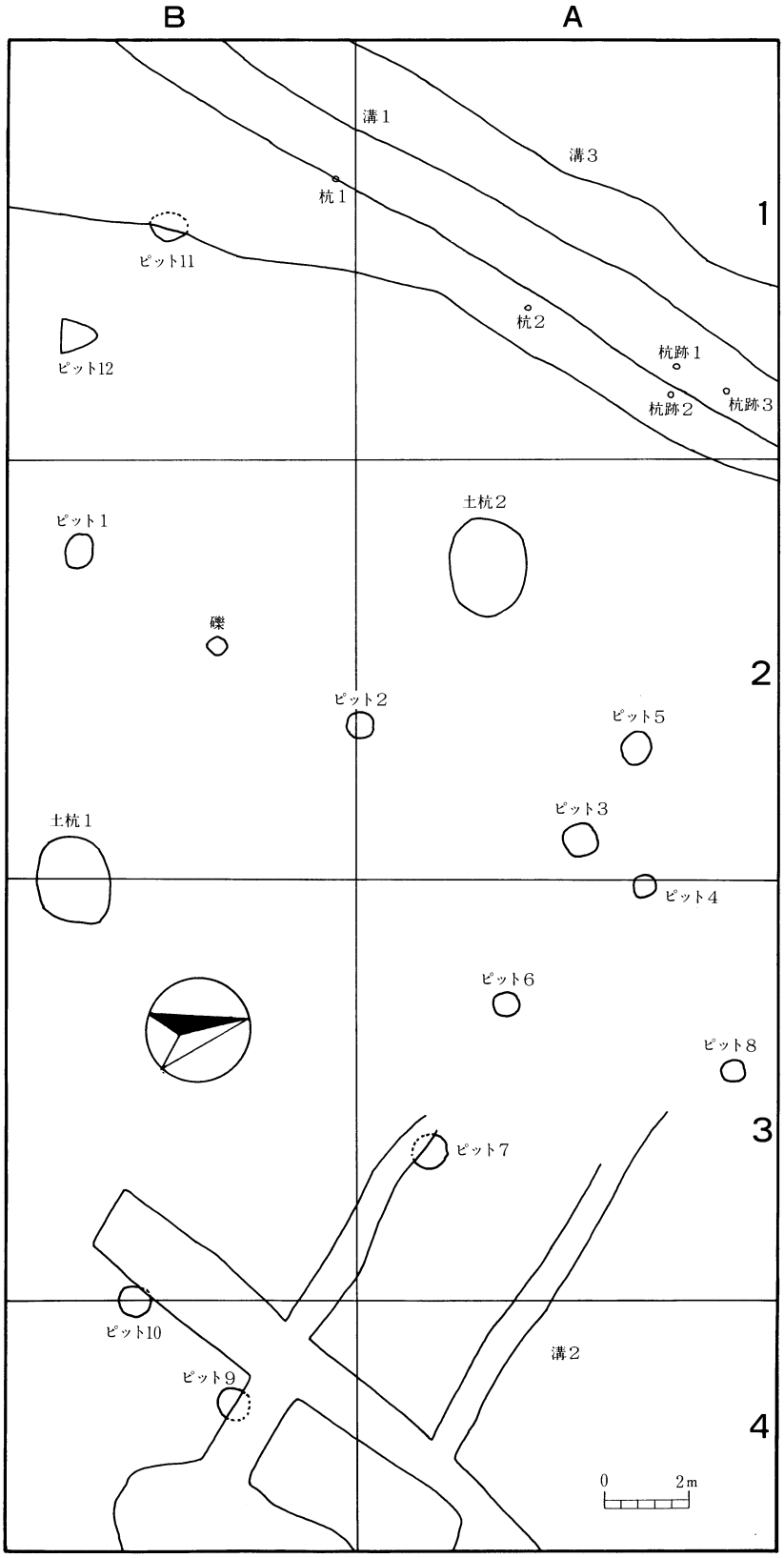
耕作土層と考えられるⅢ層は，黄褐色砂互層であり，上部には酸化鉄を持ち，最下部は灰色粘土が堆積している。部分的には複数の酸化鉄層が見られ，3枚の水田面があったことが推察される。

調査区内に残存していた地質調査用のボーリング穴を見ると水田基盤から約30cm下に地下水位があり，耕作当時も水はけの悪い水田であったことが想像された。

本遺構面における遺物は検出していない。



第5図　水田遺構



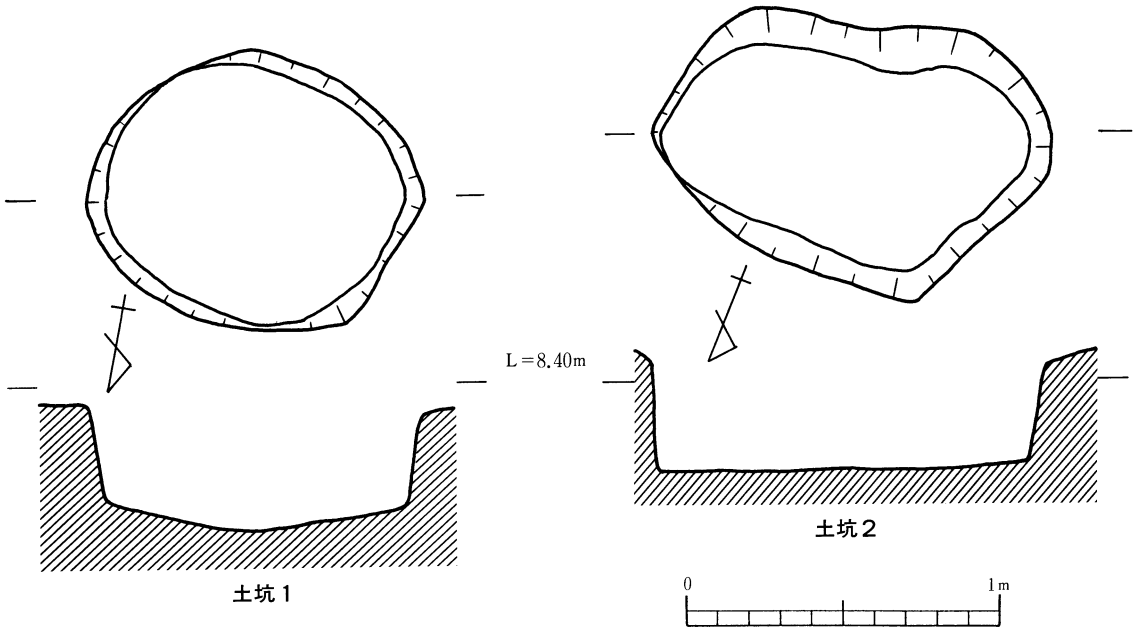
第6図　遺構分布図（近世以降）

第2節　近世

第6図のように，近世時期と見られる2基の土坑と，12基のピットが検出された。

1　土　坑

A－2・B－2区Ⅲ層上面で，2基の土坑が検出された。1号土坑は，東西方向に膨らんだ長円形で，長径109cm，短径90cmを有し，深さ37cmのたらい形を呈する土坑である。2号土坑は，1号土坑と同様に，東西方向に膨らみながら，やや歪な形をした長円形を呈している。長径は128cm，短径83cm，深さ35cmのたらい形の土坑である。1，2号土坑共に，埋土はⅡ層の灰色土であり，遺物は出土しなかった。用途は不明である。



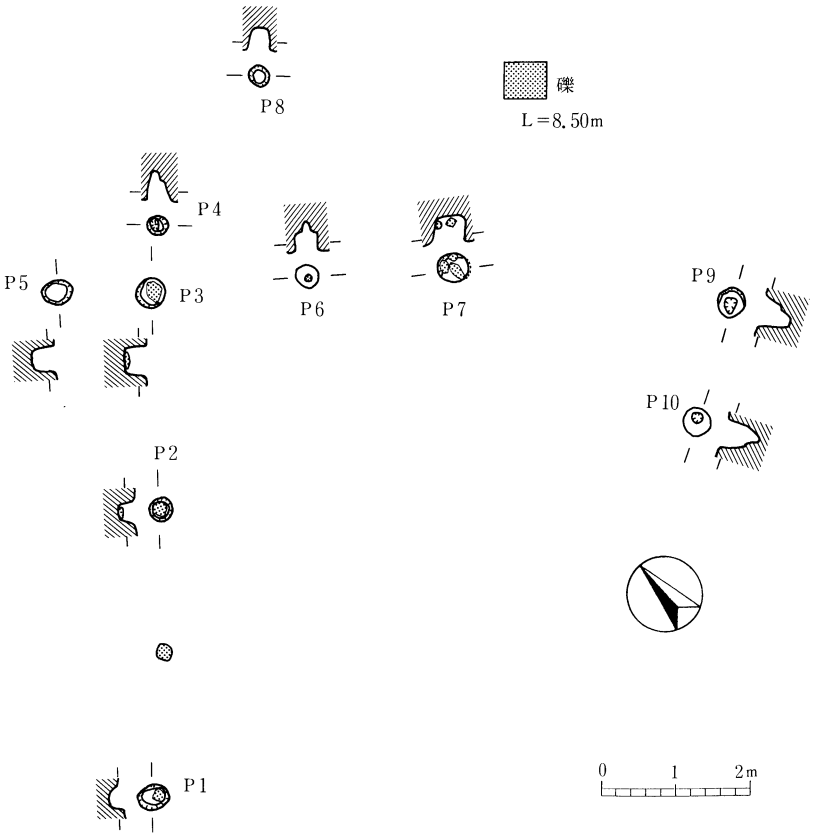
第7図　土　坑

2　ピット

A－2～3・B－1～4区Ⅲ層上面で，12基のピットが検出された。いずれのピットも30～40cmの径を持つ円形で，検出面より24cm～49cmの深さを測る。埋土はⅡ層の灰色土であり，根石を持つもの4基，底部に杭痕跡と見られる小穴を持つもの4基を確認した。遺物は出土していない。

第2表　ピット一覧表

番号	径cm	深さcm	根石	番号	径cm	深さcm	根石	番号	径cm	深さcm	根石
1	42×38	42	○	2	32×32	24	○	3	42×40	30	○
4	30×26	44	×	5	42×30	31	×	6	30×30	42	×
7	40×38	33	○	8	28×28	30	×	9	44×36	44	×
10	40×36	49	×	11	45×34	33	×	12	43×40	41	×

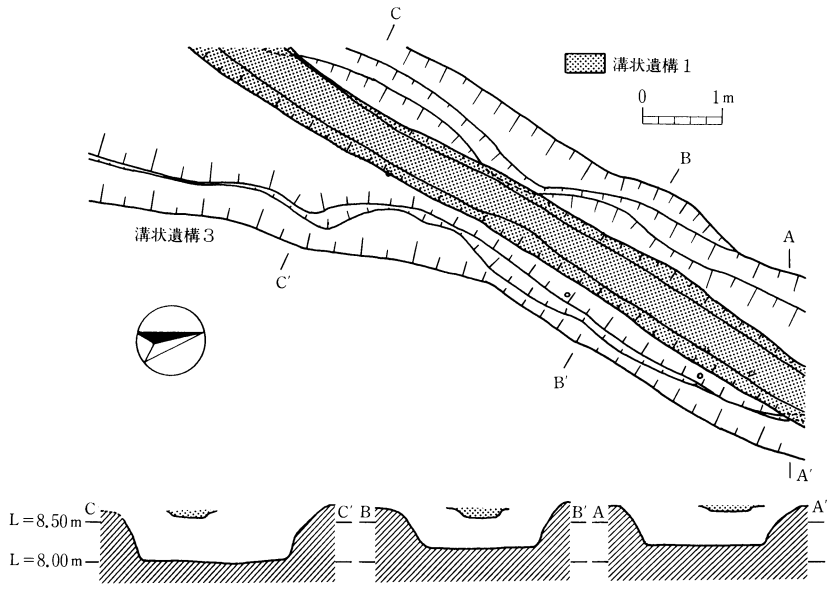


第8図　ピット

上記のピットのうち，ピット1～4はSWからNEに1列を成し，ピット5～9はこれに直交，ピット9～10は平行して配列され，そのピット間隔は，約2m内外であった。また，ピット1，ピット2の中間には，ピット検出面と同レベルで直径25cmの円礫1個が検出された。

以上のようなピットの形状や配列から見て，掘立柱住居跡ではないかと考えたが，明確な形が得られず，判断を決し得なかった。しかし，ピット3，6，7はほぼ定間隔に位置し，柵列の可能性も残る。ピット11，12の用途は不明である。

第3節　近代・現代



第9図　溝状遺構1，3

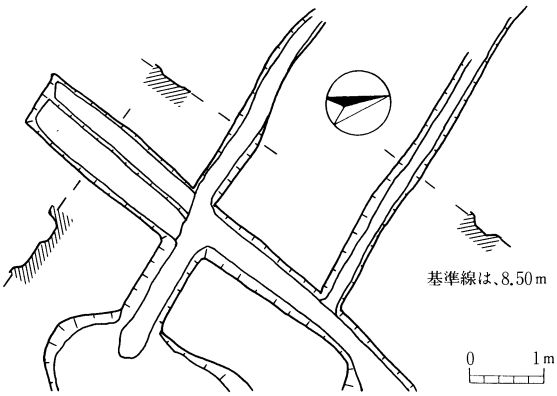
1　溝状遺構1

A－1区北端からB－1区西端Ⅱ層上面において，溝状遺構1を検出した。

溝状遺構1の検出面は北端で現地表下約110cmを測り，ゆるやかに南西に下ってB－1区西端において，現地表下約120cmを測った。検出面における長さ約8.5m，幅約60cm，深さ5cm～10cmであるが，調査区壁面では幅約180cm，深さ約50cmが確認できた。

覆土は，川砂・小石ならびに泥土であり，ガラス片・近代陶磁器片が混在して出土した。現在，調査区の北側の民家脇に，溝状遺構**1**と連絡する形で小溝が流れていることが確認でき，また，近在の人の話によっても，本溝が最近まで利用されていたことが窺われた。

2　溝状遺構2



第10図　　溝状遺構2

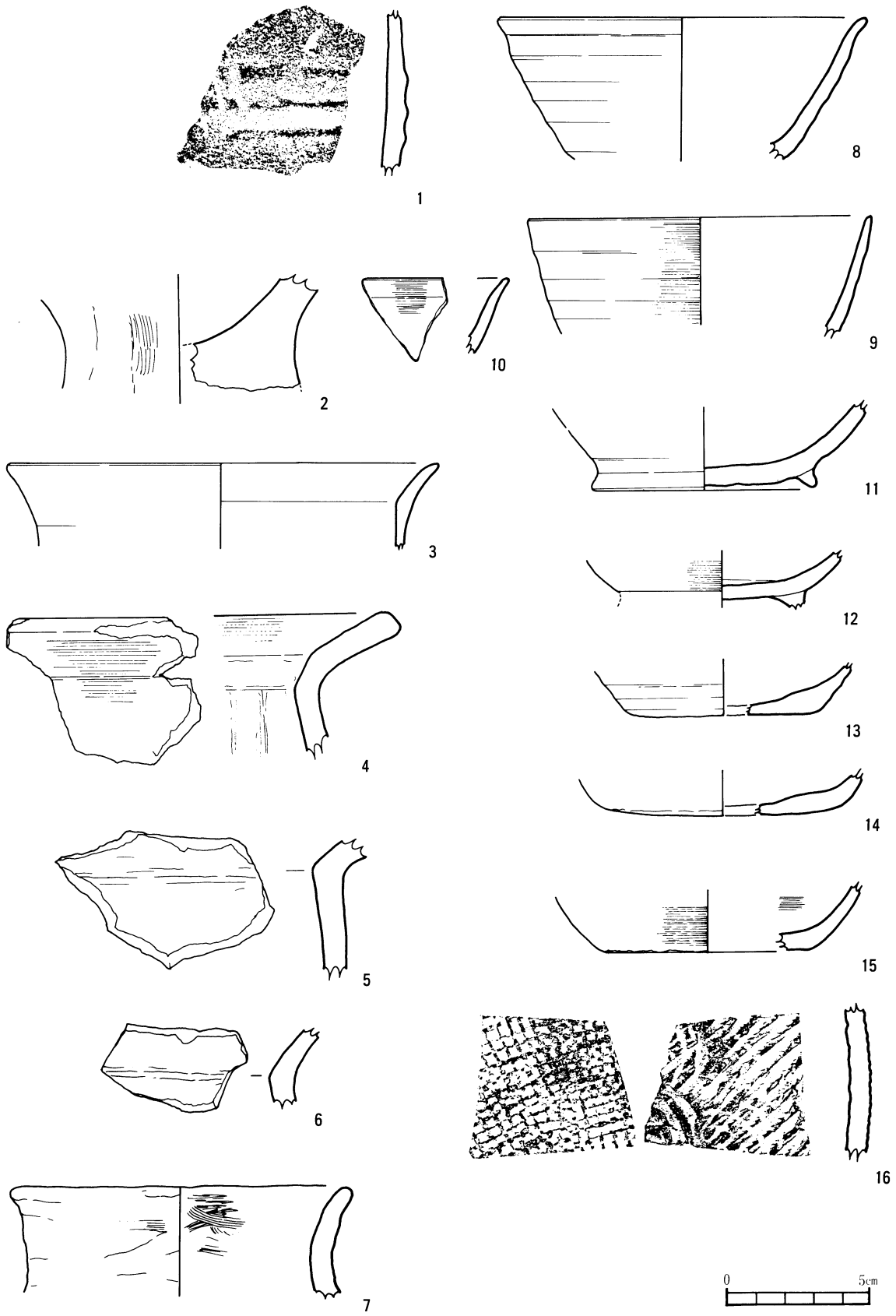
Ａ－３・４区からＢ－３・４区Ⅱ層上面において，溝状遺構**2**を検出した。本遺構は，ＮＥ－ＳＷに伸びる長さ6.5mの１条と，これに直交する長さそれぞれ4.8m，5.5mの２条，計３条から成る。これらの溝は，幅35～80cm，深さ５～10cmを計測し，表土下部の灰色土による覆土からの遺物は検出されなかった。本溝の性格・用途は不明である。

3　溝状遺構3

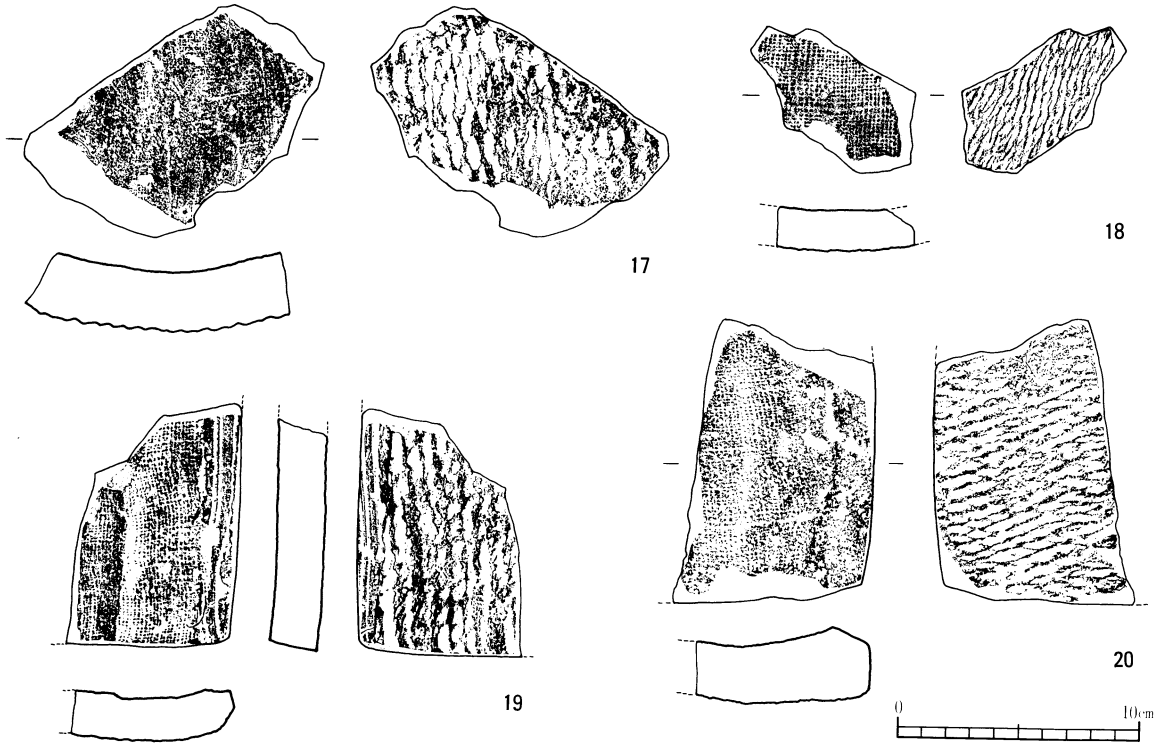
溝状遺構**1**と同一検出面において，これを包括する形で溝状遺構**3**が検出された。本溝は溝状遺構**1**と同一の流れの方向を持ち，覆土も川砂・小石ならびに泥土という溝としての堆積状況を呈していた。この中から，須恵器１点の外，薩摩焼・染付等の近世陶器・磁器が多数出土した。

また，溝東側壁には，流水による侵食作用を防ぐための杭２本及び杭跡３箇所が確認された。残存する杭の内１本は，長さ約40cm，直径約５cmを測り，先端部を鋭利に削出している。他の一本は上部及び下部が腐食のため欠落している。

なお，溝状遺構**1**と上下関係になっていることから，溝状遺構**3**が一旦埋まった後，再度本溝が形成されたものと考えられる。



第11図　Ⅳ層出土遺物　(1)



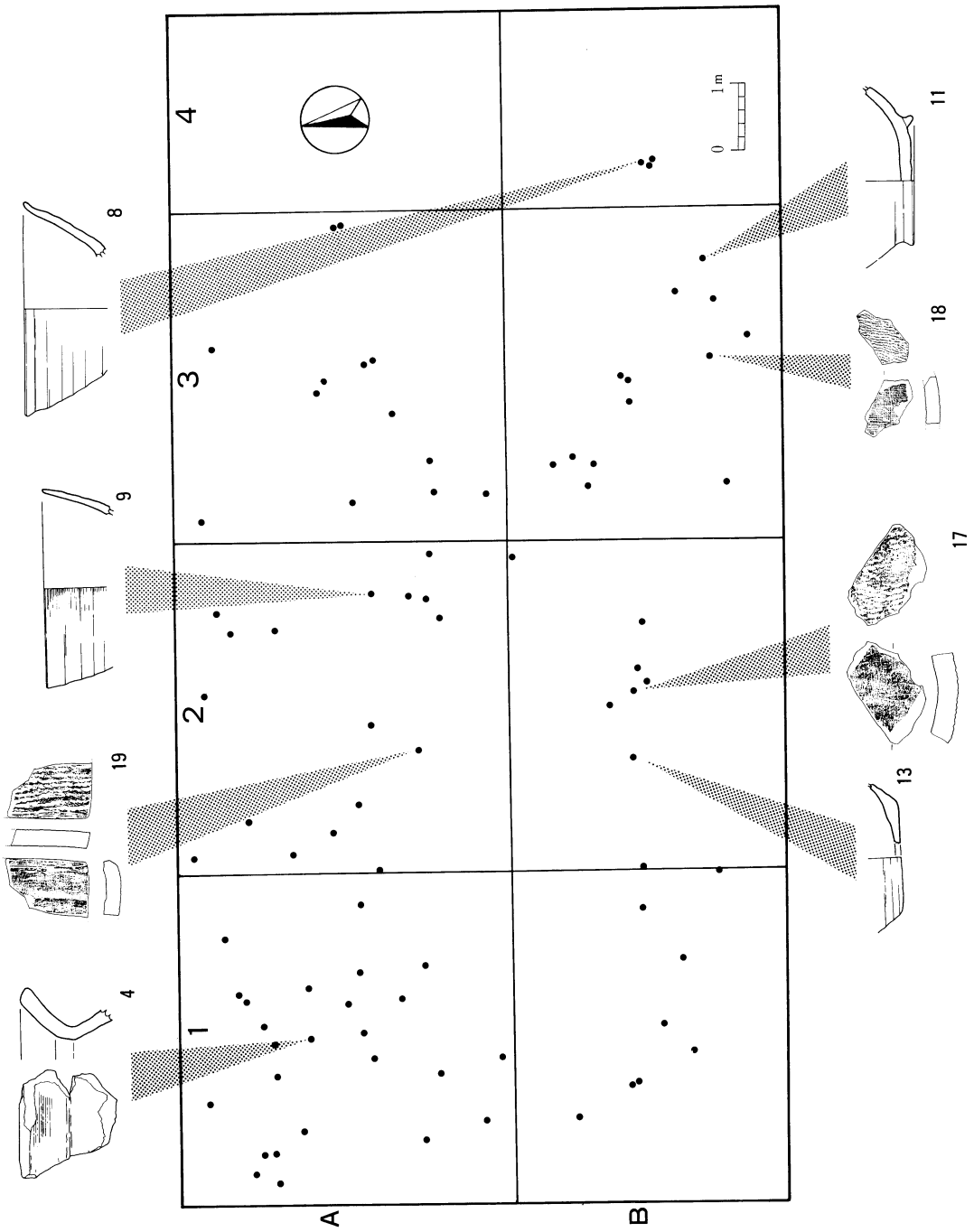
第12図　　Ⅳ層出土遺物（2）

第Ⅴ章　遺　物

第1節　第Ⅳ層出土遺物　（第11，12図ー図版4）

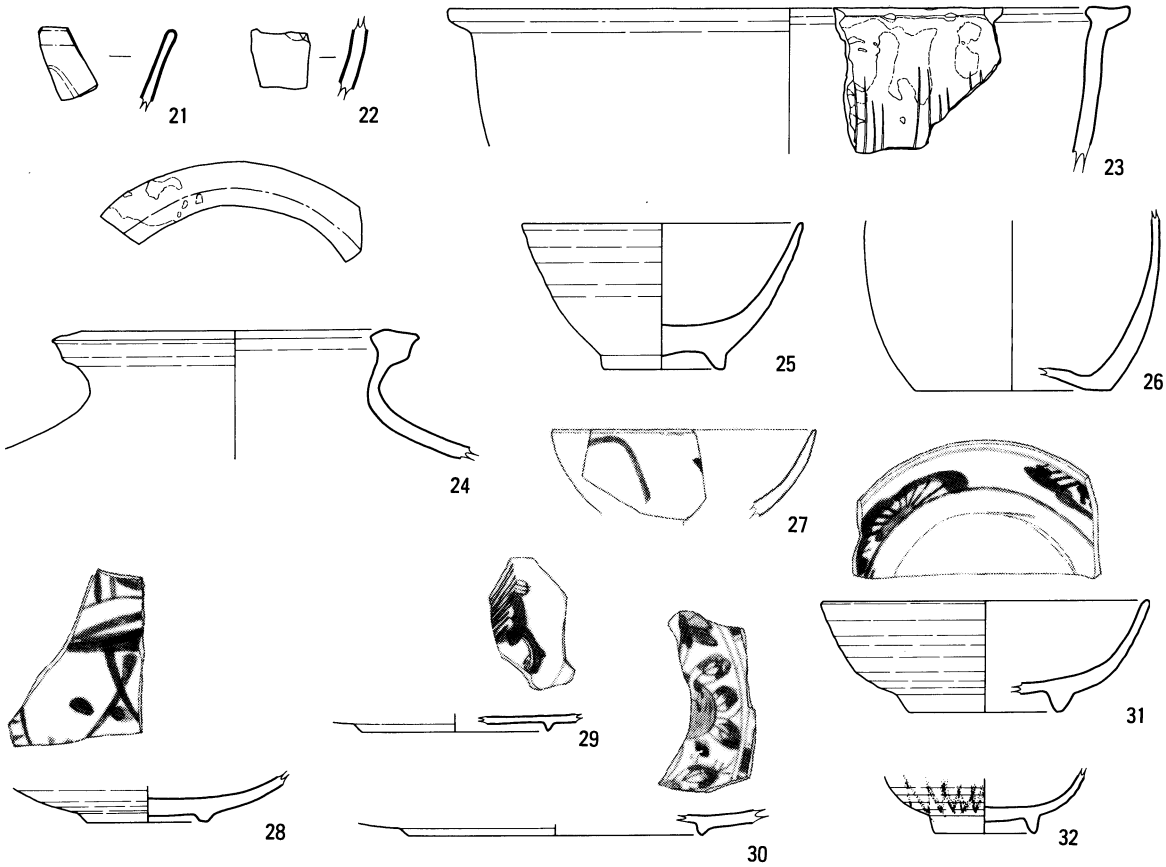
第Ⅳ層の遺物包含層は，土師器を中心に弥生土器，成川式土器，瓦等が出土した。遺物の散布状況は，第13図に示すとおりである。

1は弥生中期の壺形土器の胴部破片である。胴部には3本の三角凸帯を廻らす。摩耗が著しい。胎土には石英，長石を含み，色調は明褐色を呈している。**2**は，成川式土器の底部である。**3**～**6**は，土師器の甕形土器である。**3**は復元口径15cmで，頸部から口縁部にかけて外反し，内側頸部に「く」字状に折れ陵が施されている。**4**～**6**は，甕形土器の口縁部および頸部片である。器壁は厚く，器面は刷毛目調整，内部の頸部から胴部にかけて篦削り調整を施している。胎土は石英粒を含み，焼成はやや軟弱，色調は明褐色を呈す。**7**は復元口径12cmの壺形土器口縁部である。外器面はナデ調整を雑に，内面は篦，櫛調整を丁寧に施す。**8**～**10**は，土師器坏の口縁部である。**8**は口縁部がわずかに外反する。全体的に摩耗が著しい。回転ロクロ痕が顕著にみられる。復元口径は13cm。**11**，**12**は低い脚を有す。脚部接合部から直線的な胴部となる。**13**～**15**は篦切りの平底である。これら土師器については，9～10世紀相当のものと思われる。**16**は須恵器片で，外は格子，内面は同心円と平行タタキを施す。**17**～**19**は平瓦片である。凹面は布目，凸面には縄目痕がみられる。**19**は篦



第13図　Ⅳ層出土遺物散布状況

整形の痕跡や板状施文具の押圧痕が顕著にみられる。17は灰色を呈し，焼成はやや軟弱。18は，厚さは1.5cmと薄く，細目の縄目痕を施す。色調は明褐色を呈し，焼成はやや軟弱である。 19は面取りの篦整形痕がみられる。色調は灰色を呈し，焼成は緻密で硬い。20は撹乱層から出土した平瓦である。布目と縄目痕がみられる。また，側面と凹部端部には，面取りの篦整形痕を残す。色調は赤褐色を呈し，焼成は硬い。古代瓦である。



第14図　　溝状遺構出土遺物

0　5cm

第２節　溝状遺構出土遺物　（第14図ー図版５）

溝状遺構１及び３の覆土中より多数の遺物が検出された。その多くがガラス片やコンクリート塊であった中に，若干の陶磁器類がみられるため，ここではこれらの遺物について述べることにする。

21，22は，青磁片である。21は口縁部分で，口縁部がわずかな膨らみをもつ。外面に太型の連弁がみられる。22は胴部破片で，釉の青味が強い。いずれも明代の所産と考えられるが，小片のため詳細は不明である。23～26は黒薩摩である。23は摺鉢で復元口径28cmの口縁部破片で，胎土はやや粒の荒い赤褐色を成す。口縁部断面は「逆Ｌ」字状を呈し，口唇部は平坦に仕上げ，内側口唇部が舌状に突出する。外面はロクロ痕跡が顕著であり，わずかに釉がかかる。内面には串状施文具による摺鉢特有の刻線が，底部から口縁部近くまで伸びている。24は壺の口縁部である。口縁部はやや

短めの「逆L」字状を呈し，頸部は締まり，肩部から胴部にかけて張り出している。口唇部に重ね焼きによる残釉がみられる。**25**は復元口径11.5cmの碗である。胎土は，赤褐色で微細な石英粒を含む。内外面共にロクロによる調整痕が顕著であり，見込みは無釉である。**26**は徳利の胴部から底部で，底部には窯歪がみられる。粘土は黒褐色で，釉も黒茶褐色である。内面は無釉であるが，釉垂れがみられる。外面には，刷毛状具による，細かな調整痕が残る。**27**～**32**は染付である。**27**は復元口径11cmの碗である。胎土の色調は白色を呈し，白粘土に灰白色釉をかけ，青緑色の釉で文様を施したものである。**28**は低い高台付の碗である。白粘土に青白色の釉をかけ，その上に青黒色の釉で文様を施したものである。貫入が顕著である。畳付は無釉で，外側脚部に釉溜りがみられ，内側脚部と内底部には目砂が付着している。**29**は薄手の皿である。白粘土の上に紺色の釉で松葉状等の文様を描き，その上にわずかに青味を帯びた釉をかけたものである。畳付付近に目砂が付着する。**30**は高台付大皿である。白粘土を胎土とし，透明釉をかけ，見込みには藍色の釉を用いて２本の界線と抽象的な草花文を描く。下部は，ややくすんだ透明釉をかけ，わずかに貫入がみられる。器形に歪がある。**31**は復元口径13cmのやや扁平な坏である。青緑色の釉を用いて，内側の口縁部と底部に各１条の界線を入れ，その間に松葉文を施している。上にかけられた釉は，灰白色で見込みは無釉である。外側にも畳付以外，全面に施釉してある。**32**は碗の底部である。外面下部に釉で細い菱形文を描いているが，乱雑な描き方である。全面に灰白色の釉をかけている。

第Ⅵ章　まとめ

第1節　遺跡の概要

本遺跡は，国分市の北側半分を占めるシラス台地と，現在の中心部である沖積平野との境部分に位置し，字名でいうところの字上小川小字犬追馬場，現県立国分高校内に所在する。この付近一帯は，かつての大隅国分寺設置の地であり，その寺域の広がりやこれを取り巻く周辺状況の確認など，極めて重要な課題を持つ地域と言える。一方，国分高校とこれに隣接する国分小学校敷地は，島津義久が慶長9年(1604年)築城した舞鶴城の地でもある。舞鶴城は，現在石垣等の一部が残存するが，これまでその縄張や城館及び付随施設等について，十分な検証が行われていない状況である。

本御内遺跡は，当初は舞鶴城跡遺跡と呼称されていたが，1987年平田信芳氏の国分高校グランド内調査の際，その調査目的・規模等の要因から，本御内という古地名を用いて本御内遺跡という遺跡名が与えられた。その後，平成4年，5年度における国分高校敷地内発掘調査により，本地域から，舞鶴城関連のみならず，弥生時代以降の遺構・遺物が多数検出されたことで，本遺跡を舞鶴城跡を含む複合遺跡として取り扱うこととし，改めて本御内遺跡と呼称することとなった。なお，本遺跡が町割を含む性格上，厳密な遺跡範囲の限定は困難であり，現時点では暫定的に国分高校及び国分小学校敷地内を本御内遺跡として考えることとした。

今回，国分高校仮設校舎建築が計画されたことに伴い，上記のような遺跡の性格や背景を踏まえ，対象地域200㎡の全面発掘調査を実施することとなった。

第2節　遺　構

今回の調査では，水田遺構，ピット，土坑，溝状遺構が検出された。

水田遺構はⅣ層上面で確認され，「Y」字状に伸びる畦畔及び「水口」が検出された。また壁断面によるとⅢ層内に3枚程度の水田面が観察された。これは，本地がシラス台地の直下にあることから湧水が激しく，このため水田耕作に適した地であったことに起因するもので，比較的長期に渡って耕作が行われたことを窺わせるものである。時期的には，上位に遺物包含層が存在しないため断定は難しいが，Ⅳ層から出土した土師器等から中世相当と考えられる。

土坑・ピットはⅡ層上面で検出した。土坑は2基検出されたが，その用途は判明しなかった。またピットは，根石らしきものを持つものもあったことから，当初掘建柱の柱穴ではないかと考えたが，ピットの配列やそれぞれの間隔が定形化せず，判断を避けた。ただ，ピット**3**，**6**，**7**については直線的に配列され，その間隔もほぼ一定であることから，柵列の可能性も残った。Ⅱ層上面は，酸化鉄層を含むことから，当時は湿地であった可能性もあり，このような地形的な状況で設けられた土坑・ピットの用途は，今後の資料による判断を待ちたい。時期は，近世相当と推定される。

Ⅰ層内において3溝状遺構を検出した。まず溝状遺構**2**は，3条の溝が互いに交差し，端部が水溜り状に広がる形を呈しているが，性格は不明である。溝状遺構**1**と**3**は時期的に前後関係をなすものである。溝状遺構**3**は，内部に混在する薩摩焼き，染付等の遺物から江戸期のものと推定され

るが，壁面の崩落を防ぐための杭が打たれ，相当の流量があったことを感じさせる。この溝状遺構3の流土堆積が進行し，ほぼ埋没した後形成されたのが溝状遺構1である。この溝状以降1は，堆積土砂の中に，ガラス片等の遺物を多量に含むことから，近・現代期の遺構である。この遺構よりややシラス台地寄りに現在も小溝が流れており，最近まで流量があったものと考える。また，時期は明確でないが，調査区一帯は客土により造成をされていて，その際完全に埋没したものと判断される。溝状遺構1，3共に所謂「溝」である。

第3節　遺　物

本遺跡では，第Ⅳ層が遺物包含層であり，溝状遺構1，3内からも遺物が出土した。

Ⅳ層の遺物は，土師器が主体であり，若干の弥生土器，成川式土器，古代瓦が混ざる。全体的な出土量は少なく，土師器の完形品に近いものもわずかしか出土していない。この土師器は，脚台から胴部への立上りの膨らみが乏しいことや，篦切りの平底であるなどの器形から，9～10世紀相当のものに比定される。一方，弥生土器，成川式土器，古代瓦は土師器を主体とする層からの数点ののみの出土であること，下位層に当該遺物包含層が存在しないことなどから，生活痕跡を示すものではなく，他地域からの混入の可能性が考えられる。特に本調査区から西へ約50mの地点に，平成5年8月の調査で発見された竪穴式住居を持つ弥生土器文化層との関連が予想される。

溝状遺構からの出土遺物は，青磁，薩摩焼，染付のほか，ガラス片，現代瓦，現代陶器等種々雑多である。特に溝状遺構1からの遺物は現代に近いものが多く，ここでは溝状遺構3からの出土遺物について述べる。本遺構からは，青磁，薩摩焼，染付等が出土している。

青磁は，口縁部分と胴部分の小片が2点出土したのみである。薩摩焼はいずれも黒薩摩であり，碗，壺，徳利等がある。染付は，碗，皿があるが，その模様は抽象化されたものが多い。いずれも江戸期の所産とみられる。

先に述べたように本遺跡の出土遺物は，第Ⅳ層及び溝状遺構1，3のみである。しかし，第Ⅳ層は遺物包含層と言えども遺構は存在せず，また水田直下ということを勘案すると，この包含層の性格は，単なる遺物散布地であると言える。また，溝状遺構からの遺物出土についても，溝内における堆積物としての出土であり，溝周辺にまったく遺物が確認されなかったことから捉えても，これらの遺物が溝上流からの流れ込みであるか，または意図的な投棄であることが推察される。

以上のように，今回の調査では国分寺や舞鶴城に直接関連する資料は得られなかった。しかし，当地区における中世及び近世の一端を垣間見たことには違い無く，今後の資料を待って本地域の歴史解明の一助としたい。

《参考文献》

1　鹿児島県教育委員会「鹿児島(鶴丸)城本丸跡」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(26)　1983

2　国分市教育委員会　「妻山元遺跡」　国分市埋蔵文化財調査報告書(1)　1985

3　国分市教育委員会　「城山山頂遺跡」　国分市埋蔵文化財調査報告書(2)　1985

4　平田信芳　「本御内遺跡（国分舞鶴城跡)」
国分高校郷土クラブ調査報告書　1988

5　国分市教育委員会　「国府（小路）遺跡」　国分市埋蔵文化財調査報告書(5)　1990

6　鹿児島県教育委員会「鹿児島城二之丸跡(遺物編)」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(60)
1992

7　鹿児島県立埋蔵文化財センター「本御内遺跡(舞鶴城跡)」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(12)　1994

図　　版

1　本御内遺跡遠景　昭和42年(南から、航空写真)　　写真提供　県立国分高校

2　本御内遺跡近景（南東から）

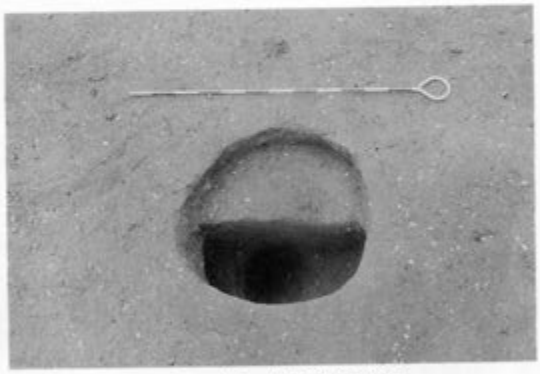
図 版 2

1　本御内遺跡の層位

2　水田遺構（畦畔）

3　近世以降遺構分布状況(ピット，土坑，溝状遺構３)

4　土坑１完掘状況



5　ピット９半裁状況

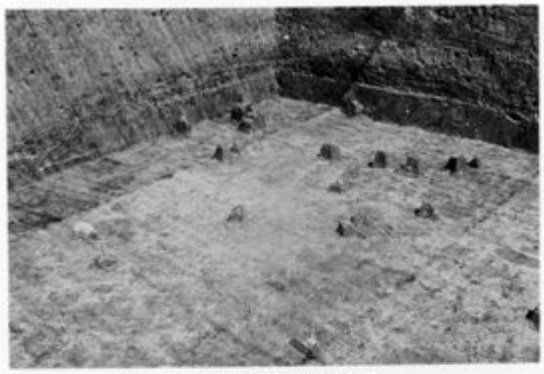
6　土坑２完掘状況

1　溝状遺構１完掘状況

2　溝状遺構１，３北側断面

3　溝状遺構３完掘状況

4　溝状遺構３内検出杭１



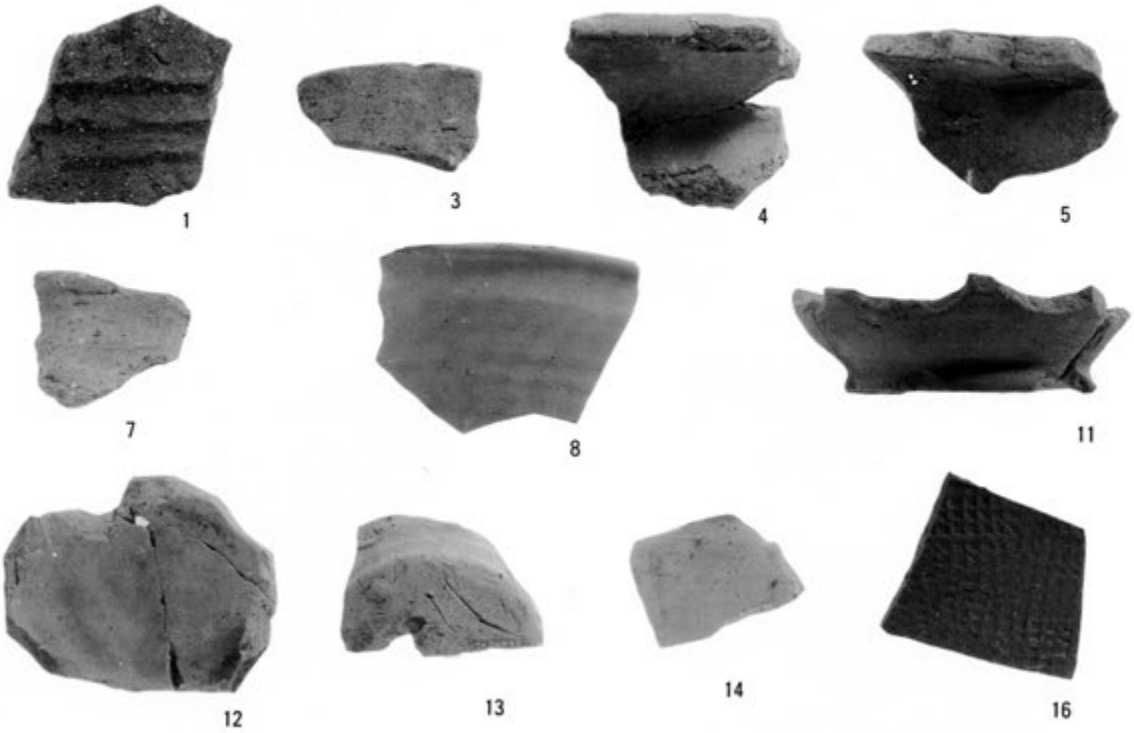
5　第Ⅳ層遺物出土状況

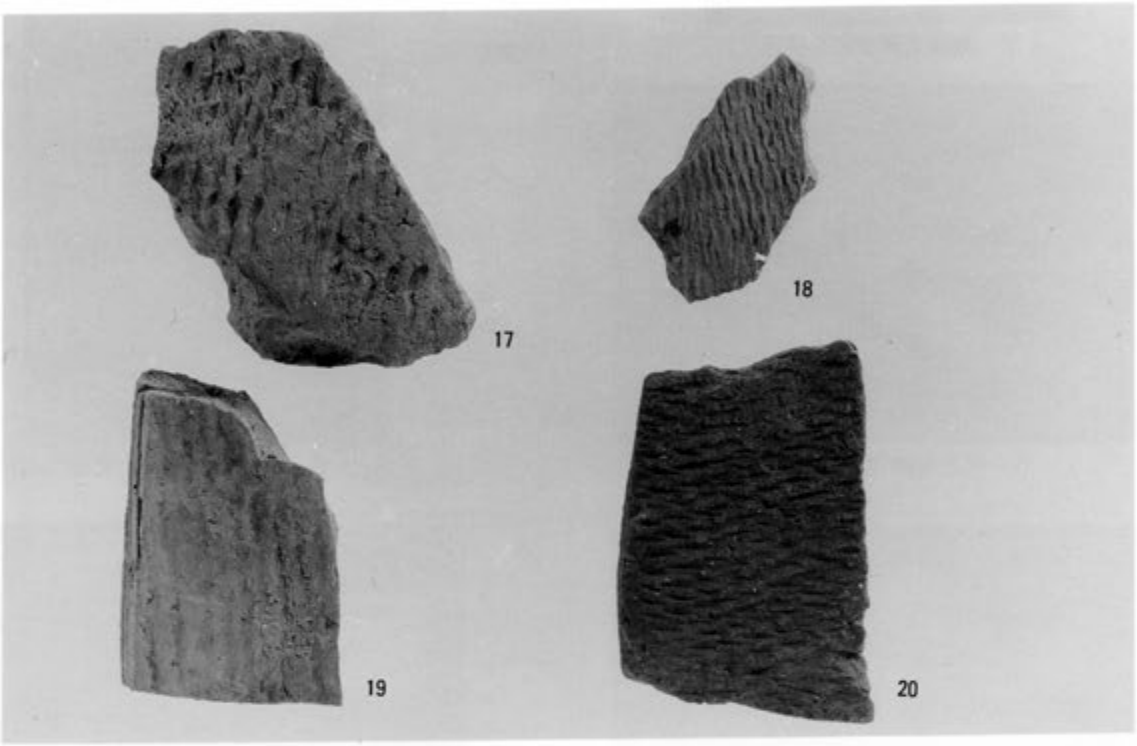
6　溝状遺構２検出状況

7　遺物(19)出土状況

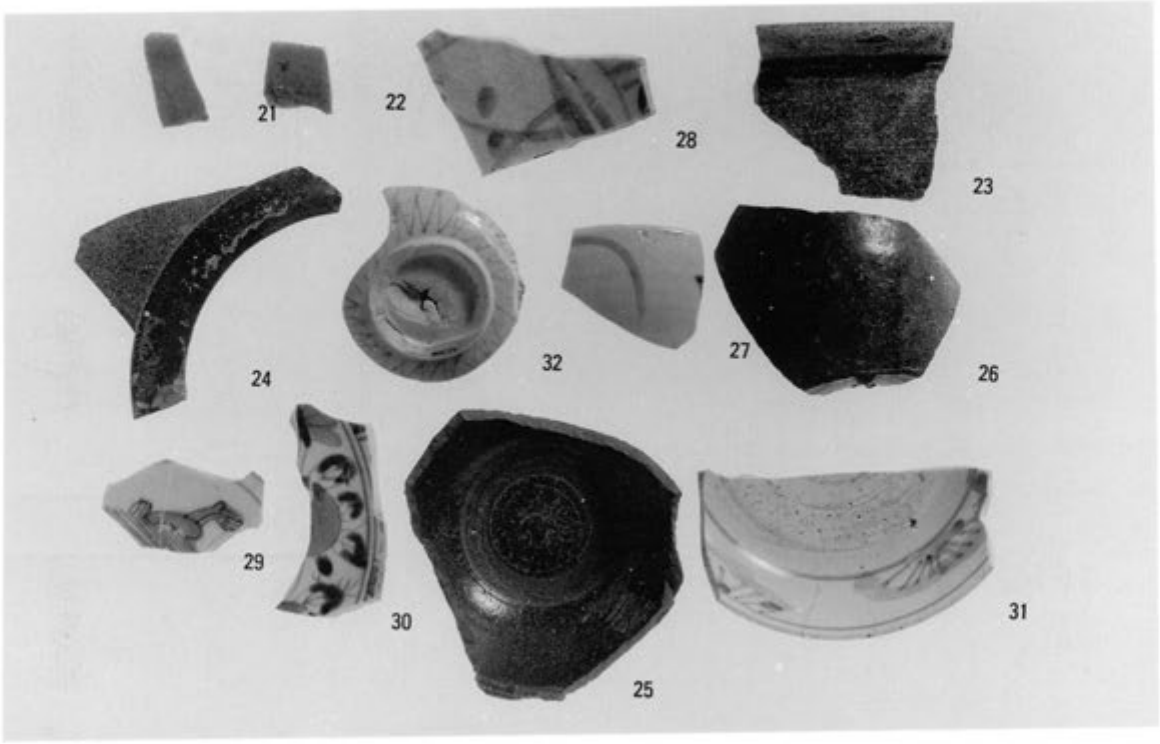
8　遺物(11)出土状況

図 版 4





第Ⅳ層出土遺物



溝状遺構内出土遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター
埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

本　御　内　遺　跡

平成７年３月31日発行

発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-56 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252
TEL(0995)65-8787　FAX(0995)65-8117

印刷　㈱浜島印刷
〒891-01 鹿児島市南栄3丁目1番地
TEL(0992)68-6191　FAX(0992)67-5995